

越山若水

2021.9.5

「どうしたの？独りにさせない合言葉」。全国大学生生活協同組合連合会が行った「たすけあい川柳コンテスト」の最優秀作である。

コロナ禍で孤独感に耐え生活する学生像が浮かぶ▼同連合会では併せて「コロナ禍の大学生生活アンケート」を実施。不安に思っていることに対する複数回答で2年生がほかの学年に比べて孤独、無気力、気分の落ち込みを感じていることが分かった。昨年からのコロナ禍の影響を2年生が最も強く受けた証しといえる▼大学への要望では1、2年生のほぼ半数が学内での同学年、先輩とのつながりの持てる機会づくりを求めた。キャンパス生活の本来の機能を望んでいるだけで、その機会を喪失した1、2年生の無念さは察するに余りある▼政府が鳴り物入りで孤独・孤立担当相を設け半年が経過した。だが誰を対象に何を行うのか、政策そのものが見えていない。また感染拡大が続くコロナ禍の中、人との交流が分断され、大学生のように孤独感に苦しむ人も増えているはずだ。先に孤独担当相を設置した英国とも協調して、早急に支援してほしい▼哲学者三木清が戦争前に著した「人生論ノート」は若者に支持された。「孤独は山になく、街にある」と説いた。三木は同書とは別にこうも記す。「心に希望さえあれば人間はどんな苦難にも堪えてゆくとができる」。大学生にかみしめてほしい。